露肆

泉鏡花

青空文庫

一

寒くなると、山の手大通りの露店に古着屋の数が殖える。半纏、股引、腹掛、溝から引揚げたようなのを、ぐにゃぐにやと捩ッつ、巻いつ、洋燈もやっと三分心が黒燻りの影に、よぼよぼした媼さんが、頭からやがて膝の上まで、荒布とも見える襤褸頭巾に包まって、死んだとも言わず、生きたとも言わず、黙って溝のふちに凍り着く見窄らしげな可哀なのもあれば、常店らしく張出した三方へ、絹二子の赤大名、鼠の子持縞という男物の袷羽織。ここらは甲斐絹裏を正札附、ずらりと並べ

て、正面左右の棚には袖裏の細り赤く見えるのから、浅葱の附紐の着いたのまで、ぎっしりと積上げて、小さな円髷に結った、顔の四角な、肩の肥った、きかぬ気らしい上さんの、黒天鵝絨の襟巻したのが、同じ色の腕までの手袋を嵌めた手に、細い銀煙管を持ちながら、店が違いやす、と澄まして講談本を、ト円心に翳していて、行交う人の風采を、時々、水牛縁の眼鏡の上からじろりと視めるのが、意味ありそうで、この連中には小母御に見えて——

湯帰りに蕎麦で極めたが、この節当もなし、と自分の身体を突掛けものにして、そそって通る、横町の酒屋の御用聞らしいのなぞは、相撲の取的が仕切ったという逃尻の、及腰で、

件の赤大名の襟を恐る恐る引張りながら、

「阿母。」

などと敬意を表する。

商売冥利、渡世は出来るもの、商はするもので、五布ばかりの鬱金の風呂敷一枚の店に、襦袢の数々。赤坂だったら奴の肌脱、四谷じゃ六方を蹈みそうな、けばけばしい胴、派手な袖。男もので手さえ通せばそこから着て行かれるまでにして、正札が品により、二分から三両内外まで、膝の周囲にばらりと捌いて、主人はと見れば、上下縞に折目あり。独鈷入の博多の帯に銀鎖を捲いて、きちんと構えた前垂掛。膝で豆算盤五寸ぐらいなのを、ぱちぱちと鳴らしながら、結立ての大円髷、水の垂り

そうな、赤い手絡の、容色もまんざらでない女房を引附けているのがある。

時節もので、めりやすの襯衣、めちやめちやの大安売、ふらんねる切地の見切物、浜から輸出品の羽二重の手巾、棄直段というのもあり、外套、まんと、古洋服、どれも一式の店さえ八九ヶ所。続いて多い、古道具屋は、あり来りで。近頃古靴を売る事は……長靴は烟突のごとく、すぽんと突立ち、半靴は叱られた体に畏つて、ごちやごちやと浮世の波に魚の漾う風情がある。

両側はさて軒を並べた居附の商人……大通りの事で、云うまでも無く真中を電車が通る……

夜店は一列片側に並んで出る。……夏の内は、西と東を各晩で

あるが、秋の中ばからは一月置きになって、大空の星の沈んだ光と、どす赤い灯の影を競いつつ、末は次第に流の淀(ながれよど)むように薄く疎(まばら)にはなるが、やがて町尽(まちはず)れまで断(た)えずに続く……

宵をちと出遅れて、店と店との間へ、脚が極(き)め込みになる卓(テエブル)子や、箱車をそのまま、場所が取れないのに、両方へ、叩頭(おじぎ)をして、

「いかがなものでございましょうか、飛んだお邪魔になりましょうが。」

「何、お前さん、お互様です。」

「では一ツ御不省(ごふしょう)なすって、」

「ええ可(よ)うございますともね。だが何ですよ。成(なり)たけ両方をゆっ

くり取るようにしておかないと、当節は喧(やかま)しいんだからね。距離をその八尺ずつというお達しでさ、御承知でもございましょうがね。」

「ですからなお恐入りますんで、」

「そこにまたお目こぼしがあろうッてもんですよ、まあ、口明(くちあけ)をなさいまし。」

「難有(ありがと)う存じます。」

などは毎々の事。

二

この次第で、露店の間は、どうして八尺が五尺も無い。蒟蒻、蒲鉾、八ツ頭、おでん屋の鍋の中、混雑と込合って、食物店は、お馴染のぶっ切飴、今川焼、江戸前取り立ての魚焼、と名告を上げると、目の下八寸の鯛焼と銘を打つ。真似はせずとも可い事を、鱗焼は気味が悪い。

引続いては兵隊饅頭、鶏卵入の滋養麺麭。……かるめら焼のお婆さんは、小さな店に鍋一つ、七つ五つ、孫の数ほど、ちょんぼりと並べて寂しい。

茶めし餡掛、一品料理、一番高い中空の赤行燈は、牛鍋の看板で、一山三銭二銭に鬻ぐ。蜜柑、林檎の水菓子屋が負けじと立てた高張も、人の目に着く手術であろう。

古靴屋の手に靴は穿かぬが、外套を売る女の、釦きらきらと羅紗の筒袖。小間物店の若い娘が、毛糸の手袋嵌めたのも、寒さを凌ぐとは見えないで、広告めくのが可憐らしい。

気取ったのは、一軒、古道具の主人、山高帽。売っても可いそうな肱掛椅子に反身の頬杖。がらくた壇上に張交ぜの二枚屏風、ずんどの銅の花瓶に、からびたコスモスを投込んで、新式な家庭を見せると、隣の同じ道具屋の亭主は、炬燵櫓に、ちょんと乗って、胡坐を小さく、風除けに、葛籠を押立てて、天窓から、その尻まですっぽりと安置に及んで、秘仏はどうだ、と達磨を極めて、寂寞として定に入る。

「や、こいつア洒落てら。」

と往来が讃めて行く。

黒い毛氈の上に、明石、珊瑚、トンボの青玉が、こつこつと寂びた色で、古い物語を偲ばすもあれば、青毛布の上に、指環、鎖、襟飾、燦爛と光を放つ合成金の、新時代を語るもあり。……また合成銀と称えるのを、大阪で発明して銀煙草を並べて売る。

「諸君、二円五十銭じゃ言うたんじゃ、可えか、諸君、熊手屋が。露店の売品の値価にしては、いささか高値じゃ思わるるじゃろうが、西洋の話じゃ、で、分るじゃろう。二円五十銭、可えか、諸君。」

と重なり合った人群集の中に、足許の溝の縁に、馬乗

提灯を動き出しそうに据えたばかり。店も何も無いのが、額を仰向けにして、大口を開いて喋る……この学生風な五ツ紋は商人ではなかった。

ここらへ顔出しをせねばならぬ、救世軍とか云える人物。

「そこでじゃ諸君、可えか、その熊手の値を聞いた海軍の水兵君が言わるるには、可、熊手屋、二円五十銭は分った、しかしながらじゃな、ここに持合わせの銭が五十銭ほか無い。すなわちこの五十銭を置いて行く。直ぐに後金の二円を持って来るから受取っておいてくれい。熊手は預けて行くぞ、誰も他のものに売らんようになあ、と云われましたが、諸君。

手附を受取って物品を預っておくんじゃからあ、」

と俯向(うつむ)いて、唾を吐いて、

「じゃから諸君、誰にしても異存はあるまい。宜(よろ)しゅうございます。行っていらっしゃいと云うて、その金子(かね)を請取(うけと)ったんじゃ、可(え)えか、諸君。ところでじゃ、約束通りに、あとの二円を持って、直ぐにその熊手を取りに来れば何事もありませんぞ。

そうら、それが遣(や)って来ん、来んのじゃ諸君、一時間経(た)ち、二時間経ち、十二時が過ぎ、半が過ぎ、どうじゃ諸君、やがて一時頃まで遣って来んぞ。

他(ほか)の露店は皆仕舞うたんじゃ。それで無うてから既に露店の許された時間は経過して、僅(わずか)に巡行の警官が見て見ぬ振(ふり)という特別の慈悲を便りに、ぼんやりと寂しい街路の霧になって行(ゆ)くのを視(なが)

めて、鼻の尖(さき)を冷たくして待っておったぞ。

処へ、てくりてくり、」

と両腕を奮(はず)んで振って、ずぼん下の脚を上げたり、下げたり。

「向うから遣(や)って来たものがある、誰じゃろうか諸君、熊手屋の待っておる水兵じゃろうか。その水兵ならばじゃ、何事も別に話は起らんのじゃ、諸君。しかるに世間というものはここが話じゃ、今来たのは一名の立派な紳士じゃ、夜会の帰りかとも思われる、何分(なにぶん)か酔うてのう。」

三

「皆さん、申すまでもありませんが、お家で大切なのは火の用心でありまして、その火の用心と申す中(うち)にも、一番危険なのが洋燈(ランプ)であります。なぜ危い。お話しをするまでもありません、過失(あやま)って取落しまする際に、火の消えませんのが、壺(つぼ)の、この、」

と目通りで、真鍮(しんちゅう)の壺をコツコツと叩く指が、掌掛(てのひら)けて、油煙で真黒(まっくろ)。

頭髪(かみ)を長くして、きちんと分けて、額にふらふらと捌(さば)いた、女難なきにしもあらずなのが、渡世となれば是非も無い。

「石油が待てしばしもなく、※(ぱっ)と燃え移るから起るのであります。御覧なさいまし、大阪の大火、青森の大火、御承知でありましょう、失火の原因は、皆この洋燈(ランプ)の墜落から転動（と妙な対句で）

を起しまする。その危険な事は、硝子壺(がらすつぼ)も真鍮壺も決して差別はありません。と申すが、唯今(ただいま)もお話しました通り、火が消えないからであります。そこで、手前商いまするのは、ラジーンと申して、金山鉱山におきまして金を溶かしまする処の、炉壺(ろつぼ)にいたしまするのを使って製造いたしました、口金(くちがね)の保助器は内務省お届済みの専売特許品、御使用の方法は唯今お目に懸けまするが、安全口金、一名火事知らずと申しまして、」

「何だ、何だ。」

と立合いの肩へ遠慮なく、唇の厚い、真赤(まっか)な顔を、ぬい、と出して、はたと睨(にら)んで、酔眼をとろりと据える。

「うむ、火事知らずか、何を、」と喧嘩腰(けんかごし)に力を入れて、もう

一息押出しながら、

「焼けたら水を打懸けろい、げい。」

と曖をするかと思うと、印半纏の肩を聳やかして、のッと行く。新姐子がばらばらと避けて通す。

と嶮な目をちょっと見据えて、

「ああいう親方が火元になります。」と苦笑。

昔から大道店に、酔払いは附いたもので、お職人親方手合の、そうしたのは有触れたが、長外套に茶の中折、髭の生えた立派なのが居る。

辻に黒山を築いた、が北風の通す、寒い背後から藪を押分けるように、杖で背伸びをして、

「踊っとるは誰(だい)じゃ、何しとるかい。」
「へい、面白ずくに踊ってるじゃござりません。唯今、鼻紙で切りました骸骨(がいこつ)を踊らせておりますんで、へい、」
「何じゃ、骸骨が、踊(おどり)を踊る。」
どたどたと立合(たちあい)の背(うしろ)に凭懸(よりかか)って、
「手品か、うむ、手品を売りよるじゃな。」
「へい、八通(やとお)りばかり認(した)めてござりやす、へい。」
「うむ、八通り、この通(とおり)か、はッはッ、」と変哲もなく、洒落(しゃれ)のめして、
「どうじゃ五厘も投げてやるか。」
「ええ、投銭、お手の内は頂きやせん、材(たね)あかしの本を売るので

げす、お求め下さいやし。」
「ふむ……投銭は謝絶する、見識じゃな、本は幾干(いくら)だ。」
「五銭、」
「何、」
「へい、お立合にも申しておりやす。へい、ええ、ことの外音声を痛めておりやすんで、お聞苦しゅう、……へい、お極(きま)りは五銅の処、御愛嬌(ごあいきょう)に割引をいたしやす、三銭でございやす。」
「高い！」
と喝(しか)って、
「手品屋、負けろ。」
「毛頭、お掛値(かけね)はございやせん。宜(よろ)しくばお求め下さいやし、三

銭でございやす。」

「一銭にせい、一銭じゃ。」

「あッあ、推量々々。」と対手(あいて)にならず、人の環(わ)の底に掠(かす)れた声、地(つち)の下にて踊るよう。

「お次は相場の当る法、弁ずるまでもありませんよ。……我人(われひと)ともに年中螻(おけら)では不可(いけ)ません、一攫千金(いっかくせんきん)、お茶の子の朝飯前という……次は、」

と細字(さいじ)に認(したた)めた行燈(あんどん)をくるりと廻す。綱が禁札、ト捧げた体(てい)で、芳原(よしわらかぶ)被りの若いもの。別に絣(かすり)の羽織を着たのが、板本を抱えて彳(たたず)む。

「諸人に好かれる法、嫌われぬ法も一所ですな、愛嬌のお守(まもり)とい

う条目。無銭で米の買える法、火なくして暖まる法、飲まずに酔う法、歩行(あるい)かずに道中する法、天に昇る法、色を白くする法、婦(おんな)の惚(ほ)れる法。」

四

「お痛(いた)え、痛え、」

尾を撮(つま)んで、によろりと引立(ひったて)ると、青黒い背筋が畝(うね)って、びくりと鎌首を擡(もた)げる発奮(はずみ)に、手術服という白いのを被(はお)ったのが、手を振って、飛上る。

「ええ驚いた、蛇が啖(くら)い着くです——だが、諸君、こんなことで

は無い。……この木製の蛇が、僕の手練に依って、不可思議なる種々の運動を起すです。急がない人は立って見て行(ゆ)きたまえよ、奇々妙々感心というのだから。

だが、諸君、だがね、僕は手品師では無いのだよ。蛇使いではないのですが、こんな処じゃ、誰も衛生という事を心得ん。生命(いのち)が大切という事を弁別(わきま)えておらん人ばかりだから、そこで木製の蛇の運動を起すのを見て行(ゆ)きたまえと云うんだ。歯の事なんか言って聞かしても、どの道分りはせんのだから、無駄だからね、無駄な話だから決して売ろうとは云わんです。売らんのだから買わんでも宜しい。見て行(ゆ)きたまえ。見物をしてお出でなさい。今、運動を起す、一分間にして暴れ出す。

だが諸君、だがね諸君、歯磨(はみがき)にも種々(いろいろ)ある。花王歯磨、ライオン象印、クラブ梅香散……ざっと算(かぞ)えた処で五十種以上に及ぶです。だが、諸君、言ったって無駄だ、どうせ買いはしまい、僕も売る気は無い、こんな処じゃ分るものは無いのだから、売りやせん、売りやせんから木製の蛇の活動を見て行(ゆ)きたまえ。」

と青い帽子をずぼらに被(かぶ)って、目をぎろぎろと光らせながら、憎体(にくてい)な口振(くちぶり)で、歯磨を売る。

二三軒隣では、人品骨柄(じんぴんこつがら)、天晴(あっぱれ)、黒縮緬(くろちりめん)の羽織でも着せたいのが、悲愴(ひそう)なる声を揚げて、殆(ほとん)ど歎願に及ぶ。

「どうぞ、お試し下さい、ねえ、是非一回御試験が仰ぎたい。口中に熱あり、歯の浮く御仁、歯齦(はぐき)の弛(ゆる)んだお人、お立合の中に、

もしや万一です。口の臭い、舌の粘々するお方がありましたら、ここに出しておきます、この芳口剤で一度漱をして下さい。」

と一口がぶりと遣って、悵然として仰反るばかりに星を仰ぎ、頭髪を、ふらりと掉って、ぶらぶらと地へ吐き、立直ると胸を張って、これも白衣の上衣兜から、綺麗な手巾を出して、口のまわりを拭いて、ト恍惚とする。

「爽かに清き事、」

と黄色い更紗の卓子掛を、しなやかな指で弾いて、

「何とも譬えようがありません。ただ一分間、一口含みまして、二三度、口中を漱ぎますと、歯磨楊枝を持ちまして、ものの三十分使いまするより、遥かに快くなるのであります。口中には限り

ません。精神の清く爽かになりますに従うて、頭痛などもたちどころに治ります。どうぞ、お試し下さい、口は禍の門、諸病は口からと申すではありませんか、歯は大事にして下さい、口は綺麗にして下さいまし、ねえ、私が願います、どうぞ諸君。」

「この砥石が一挺ありましたらあ、今までのよに、盥じゃあ、湯水じゃあとウ、騒ぐにはア及びませぬウ。お座敷のウ真中でもウ、お机、卓子台の上エでなりとウ、ただ、こいに遣って、すういすういと擦りますウばかりイイイ。菜切庖丁、刺身庖丁ウ、向ウへ向ウへとウ、十一二度、十二三度、裏を返しまして、黒い色のウ細い砥ウ持イましてエ、柔こう、すいと一二度ウ、二三度ウ、撫るウ撫るウばかりイ、このウ菜切庖丁が、面白

いようにイ切まあすウる、切れまあすウる。こいに、こいに、さツくりさツくり横紙が切れますようなら、当分のウ内イ、誰方様のウお邸でもウ、切ものに御不自由はございませぬウ。このウ細い方一挺がア、定価は五銭のウ処ウ、特別のウ割引イでエ、粗のと二ツ一所に、名倉の欠を添えまして、三銭、三銭でエ差上げますウ、剪刀、剃刀磨にイ、一度ウ磨がせましても、二銭とウ三銭とは右から左イ……」

と賽の目に切った紙片を、膝にも敷物にもぱらぱらと夜風に散らして、縞の筒袖凜々しいのを衝と張って、菜切庖丁に金剛砂の花骨牌ほどな砥を当てながら、余り仰向いては人を見ぬ、包ましやかな毛糸の襟巻、頬の細いも人柄で、大道店の息子株。

押並んで、めくら縞の襟の剥げた、袖に横撫のあとの光る、同じ紺のだふだふとした前垂を首から下げて、千草色の半股引、膝のよじれたのを捻って穿いて、ずんぐりむっくりと肥ったのが、日和下駄で突立って、いけずな悴が、三徳用大根皮剥、というのを喚く。

五

その鯉口の両肱を突張り、手尖を八ツ口へ突込んで、頸を襟へ、もぞもぞと擦附けながら、

「小母さん、買ってくんねえ、小父的買いねえな。千六本に、お

なますに、皮剥と一所に出来らあ。内が製造元だから安いんだぜ。大小あらあ。大が五銭で小が三銭だ。皮剥一ツ買ったってお前、三銭はするぜ、買っとくんねえ、あ、あ、あ、」

と引捻れた四角な口を、額まで闊と開けて、猪首を附元まで窘める、と見ると、仰状に大欠伸。余り度外れなのに、自分から吃驚して、

「はっ、」と、突掛る八ツ口の手を引張出して、握拳で口の端をポン、と蓋をする、トほっと真白な息を大きく吹出す……

いや、順に並んだ、立ったり居たり、凸凹としたどの店も、同じように息が白い。むらむらと沈んだ、燻った、その癖、師走空に澄透って、蒼白い陰気な灯の前を、ちらりちらりと冷たい

魂が徜徉う姿で、耄碌頭布の皺から、押立てた古服の襟許から、汚れた襟巻の襞の中から、朦朧と顕れて、揺れる火影に入乱れる処を、ブンブンと唸って来て、大路の電車が風を立てつつ、颯と引攫って、チリチリと紫に光って消える。

とどの顔も白茶けた、影の薄い、衣服前垂の汚目ばかり火影に目立って、煤びた羅漢の、トボンとした、寂しい、濁った形が溝端にばらばらと残る。

こんな時は、時々ばったりと往来が途絶えて、その時々、対合った居附の店の電燈瓦斯の晃々とした中に、小僧の形や、帳場の主人、火鉢の前の女房などが、絵草子の裏、硝子の中、中でも鮮麗なのは、軒に飾った紅入友染の影に、くっきり

と顕れる。

露店は茫として霧に沈む。

たちまち、ふらふらと黒い影が往来へ湧いて出る。その姿が、毛氈の赤い色、毛布の青い色、風呂敷の黄色いの、寂しい媼さんの鼠色まで、フト判然と凄い星の下に、漆のような夜の中に、淡い彩して顕れると、商人連はワヤワヤと動き出して、牛鍋の唐紅も、飜然と揺ぎ、おでん屋の屋台もかッと気競が出て、白気濃やかに狼煙を揚げる。翼の鈍い、大きな蝙蝠のように地摺に飛んで所を定めぬ、煎豆屋の荷に、糸のような火花が走って、

「豆や、煎豆、煎立豆や、柔い豆や。」

と高らかに冴えて、思いもつかぬ遠くの辻のあたりに聞える。

また一時、がやがやと口上があちこちにはじまるのである。

が、次第に引潮が早くなって、――やっと柵にかかった海草のように、土方の手に引摺られた古股引を、はずすまじとて、媼さんが曲った腰をむずむずと動かして、溝の上へ膝を摺出す、その効なく……博多の帯を引掴みながら、素見を追懸けた亭主が、値が出来ないで舌打をして引返す……煙草入に引懸っただぼ鯊を、鳥の毛の采配で釣ろうと構えて、ストンと外した玉屋の爺様が、餌箱を検べる体に、財布を覗いて鬱ぎ込む、歯磨屋の卓子の上に、お試用に掬出した粉が白く散って、売るものの鰌髯にも薄り霜を置く――初夜過ぎになると、その

一時々々、大道店の灯筋を、霧で押伏せらるる間が次第に間近になって、盛返す景気がその毎に、遅く重っくるしくなって来る。

ずらりと見渡した皆がしょんぼりする。

勿論、電燈の前、瓦斯の背後のも、寝る前の起居が忙しい。

分けても、真白な油紙の上へ、見た目も寒い、千六本を心太のように引散らして、ずぶ濡の露が、途切れ途切れにぽたぽたと足を打って、溝縁に凍りついた大根剥の悴が、今度は堪らなそうに、凍んだ両手をぶるぶると唇へ押当てて、貧乏揺ぎを忙しくしながら、

「あ、あ、」

とまた大欠伸(おおあくび)をして、むらむらと白い息を吹出すと、筒抜けた大声で、

「大福が食いてえなッ。」

六

「大福餅が食べたいとさ、は、は、は、」

と直きその傍(そば)に店を出した、二分心(にぶしん)の下で手許(てもと)暗く、小楊枝(こようじ)を削っていた、人柄なだけ、可憐(いとし)らしい女隠居が、黒い頭巾(ずきん)の中から、隣を振向いて、掠(かす)れ掠れ笑って言う。

その隣の露店は、京染正紺請合(しょうこんうけあい)とある足袋の裏を白く飜(かえ)し

て、ほしほしと並べた三十ぐらいの女房で、中がちょいと隔っただけ、三徳用の言った事が大道でぼやけて分らず……但し吃驚するほどの大音であったので、耳を立てて聞合わせたものであった。

会得が行くとさも無い事だけ、おかしくなったものらしい。

「大福を……ほほほ、」と笑う。

とその隣が古本屋で、行火の上へ、髯の伸びた痩せた頤を乗せて、平たく蹲った病人らしい陰気な男が、釣込まれたやら、

「ふふふ、」

と寂しく笑う。

続いたのが、例の高張を揚げた威勢の可い、水菓子屋、向

顱巻の結び目を、山から飛んで来た、と押立てたのが、仰向けに反を打って、呵々と笑出す。次へ、それから、引続いて――一品料理の天幕張の中などは、居合わせた、客交じりに、わはわはと笑を揺る。年内の御重宝九星売が、恵方の方へ突伏して、けたけたと堪らなそうに噴飯したれば、苦虫と呼ばれた歯磨屋が、うンふンと鼻で笑う。声が一所で、同音に、もぐらもちが昇天しようと、水道の鉄管を躍り抜けそうな響きで、片側一条、夜が鳴って、哄と云う。時ならぬに、木の葉が散って、霧の海に不知火と見える灯の間を白く飛ぶ。

なごりに煎豆屋が、かッと笑う、と遠くで凄まじく犬が吠えた。

軒の辺を通魔がしたのであろう。

北へも響いて、町尽の方へワッと抜けた。

時に片頬笑みさえ、口許に莞爾ともしない艶なのが、露店を守って一人居た。

縦通から横通りへ、電車の交叉点を、その町尽れの方へ下ると、人も店も、灯の影も薄く歯の抜けたような、間々を冷い風が渡る癖に、店を一ツ一ツ一重ながら、茫と渦を巻いたような霧で包む。同じ燻ぶった洋燈も、人の目鼻立ち、眉も、青、赤、鼠色の地の敷物ながら、さながら鶏卵の裡のように、渾沌として、ふうわり街燈の薄い影に映る。が、枯れた柳の細い枝は、幹に行燈を点けられたより、かえってこの中に、処々すっきりと、

星に蒼(あお)く、風に白い。

その根に、莫蓙(ござ)を一枚の店に坐ったのが、件(くだんおんな)の婦で。

年紀(とし)は六七……三十にまず近い。姿も顔も窶(やつ)れたから、ちと老けて見えるのであろうも知れぬ。綿らしいが、銘仙縞(めいせんじま)の羽織を、なよなよとある肩に細く着て、同じ縞物の膝を薄く、無地ほどに細い縞の、これだけはお召らしいが、透切(すきぎ)れのした前垂(まえだれ)を《し》めて、昼夜帯の胸ばかり、浅葱(あさぎ)の鹿子(かのこ)の下《したじめ》なりに、乳の下あたり膨(ふっく)りとしたのは、鼻紙も財布も一所に突込(つっこ)んだものらしい。

ざっと一昔は風情だった、肩掛というのを四つばかりに畳んで敷いた。それを、褄(つま)は深いほど玉は冷たそうな、膝の上へ掛けた

ら、と思うが、察するに上へは出せぬ寸断の継填らしい。火鉢も無ければ、行火もなしに、霜の素膚は堪えられまい。

黒繻子の襟も白く透く。

油気も無く擦切るばかりの夜嵐にばさついたが、艶のある薄手な丸髷がツくりと、焦茶色の絹のふらしてんの襟巻。房の切れた、男物らしいのを細く巻いたが、左の袖口を、ト乳の上へしよんぼりと捲き込んだ袂の下に、利休形の煙草入の、裏の緋塩瀬ばかりが色めく、がそれも褪せた。

生際の曇った影が、瞼へ映して、面長なが、さして瘠せても見えぬ。鼻筋のすっと通ったを、横に掠めて後毛をさらりと掛けつつ、ものうげに払いもせず……切の長い、睫の濃いのを伏

目(しめ)になって、上気して乾くらしい唇に、吹矢の筒を、ちょいと含んで、片手で持添えた雪のような肱(ひじ)を搦(から)む、唐縮緬(とうちりめん)の筒袖のへりを取った、継合わせもののその、緋鹿子(ひがのこ)の媚(なまめ)かしさ。

七

三枚ばかり附木(つけぎ)の表へ、（一(ひと)くみ）も仮名で書き、（二せん）も仮名で記して、前に並べて、きざ柿の熟したのが、こつこつと揃ったような、昔は螺(たにし)が尼になる、これは紅茸(べにたけ)の悟(さとり)を開いて、ころりと参った張子(はりこ)の達磨(だるま)。

目ばかり黒い、けばけばしく真赤(まっか)な禅入(ぜんにゅう)を、木兎引(ずくひき)の木兎、

で三寸ばかりの天目台、すくすくとある上へ、大は小児の握拳、小さいのは団栗ぐらいな処まで、ずらりと乗せたのを、その俯目に、ト狙いながら、件の吹矢筒で、フッ。

カタリといって、発奮もなく引くりかえって、軽く転がる。その次のをフッ、カタリと飜る。続いてフッ、カタリと下へ。フッフッ、カタカタカタと毛を吹くばかりの呼吸づかいに連れて、五つ七つたちどころに、パッパッと石鹸玉が消えるように、上手にでんぐり、くるりと落ちる。

落ちると、片端から一ツ一ツ、順々にまた並べて、初手からフッと吹いて、カタリといわせる。……同じ事を、絶えず休まずに繰返して、この玩弄物を売るのであるが、玉章もなし口上もなし

で、ツンとしたように黙っているので。

霧の中に笑の虹が、溌と渡った時も、独り莞爾ともせず、傍目も触らず、同じようにフッと吹く。

カタリと転がる。

「大福、大福、大福かい。」

とちと粘って訛のある、ギリギリと勘走った高い声で、亀裂を入らせるように霧の中をちょこちょこ走りで、玩弄物屋の婦の背後へ、ぬっと、鼠の中折を目深に、領首を覗いて、橙色の背広を着、小造りなのが立ったと思うと、

「大福餅、暖い！」

また疳走った声の下、ちょいと蹲む、と疾い事、筒服の膝を

とんと揃えて、横から当って、婦の前垂に附着くや否や、両方の衣兜へ両手を突込んで、四角い肩して、一ふり、ぐいと首を振ると、ぴんと反らした鼻の下の髭とともに、砂除けの素通し、ちょんぼりした可愛い目をくるりと遣ったが、ひょんな顔。

……というものは、その、

「……暖い！……」を機会に、行火の箱火鉢の蒲団の下へ、潜込ましたと早合点の膝小僧が、すぽりと気が抜けて、二ツ、ちょこなんと揃って、灯に照れたからである。

橙背広のこの紳士は、通り掛りの一杯機嫌の素見客でも何でもない。冷かし数の子の数には漏れず、格子から降るという長い煙草に縁のある、煙草の脂留、新発明螺旋仕懸ニッケル製の、巻

莨(きたばこ)の吸口を売る、気軽な人物。

自から称して技師と云う。

で、衆を立たせて、使用法を弁ずる時は、こんな軽々しい態度のものではない。

下目づかいに、晃々(きらきら)と眼鏡を光らせ、額で睨(にら)んで、帽子を目深(まぶか)に、さも歴々が忍びの体(てい)。冷々然として落着き澄まして、咳(しわぶき)さえ高うはせず、そのニコチンの害を説いて、一吸(ひとすい)の巻莨から生ずる多量の沈澱物をもって混濁した、恐るべき液体をアセチリンの蒼光(あおびかり)に翳(かざ)して、屹(き)と試験管を示す時のごときは、何某(なにがし)の教授が理化学の講座へ立揚(たちあが)ったごとく、風采四辺(ふうさいあたり)を払う。

そこで、公衆は、ただ僅(わずか)に硝子(がらす)の管へ煙草を吹込んで、びくび

くと遣ると水が濁るばかりだけれども、技師の態度と、その口上のぱきぱきとするのに、ニコチンの毒の恐るべきを知って、戦慄に及んで、五割引が盛に売れる。

なかなかどうして、歯科散が試験薬を用いて、立合の口中黄色い歯から拭取った口塩から、たちどころに、黴菌を躍らして見せるどころの比ではない。

よく売れるから、益々得意で、澄まし返って説明する。

が、夜がやや深く、人影の薄くなったこうした時が、技師大得意の節で。今まで嘘を堪えたように、むずむずと身震いを一つすると、固くなっていた卓子の前から、早くもがらりと体を砕いて、飛上るように衝と腰を軽く、突然ひょいと隣のおでん屋へ

入って、煮込を一串引攫う。

こいつを、フッフッと吹きながら、すぺりと古道具屋の天窓を撫でるかと思うと、次へ飛んで、あの涅槃に入ったような、風除葛籠をぐらぐら揺ぶる。

八

その時きゃっきゃっと高笑、靴をぱかぱかと傍へ外れて、どの店と見当を着けるでも無く、脊を屈めて蹲った婆さんの背後へちょいと踞んで、

「寒いですね。」

と声を掛けて、トントンと肩を叩いてやったもので。

「きやっきやっ、」とまた笑うて、横歩行きにすらすらすら、で、居合わす、古女房の背をドンと啖わす。突然、年増の行火の中へ、諸膝を突込んで、けろりとして、娑婆を見物、という澄ました顔付で、当っている。

露店中の愛嬌もので、総籬の柳縹さん。

すなわちまた、その伝で、大福暖いと、向う見ずに遣った処、手遊屋の婦は、腰のまわりに火の気が無いので、膝が露出しに大道へ、莫蓙の薄霜に間拍子も無く並んだのである。

橙色の柳縹子、気の抜けた肩を窄めて、ト一つ、大きな達磨を眼鏡でぎらり。

婦は澄ましてフッと吹く……カタリ……

はッと頤を引く間も無く、カタカタカタと残らず落ちると、直ぐに、そのへりの赤い筒袖の細い雪で、一ツ一ツ拾って並べる。

「堪らんですね、寒いですな、」

と髯を捻った。が、大きに照れた風が見える。

斜違にこれを視めて、前歯の金をニヤニヤと笑ったのは、総髪の大きな頭に、黒の中山高を堅く嵌めた、色の赤い、額に畝々と筋のある、頬骨の高い、大顔の役人風。迫った太い眉に、大い眼鏡で、胡麻塩髯を貯えた、頤の尖った、背のずんぐりと高いのが、絣の綿入羽織を長く着て、霜降のめりやすを太く着込んだ巌丈な腕を、客商売とて袖口へ引込めた、その手に

一条の竹の鞭を取って、バタバタと叩いて、三州は岡崎、備後は尾ノ道、肥後は熊本の刻煙草を指示す……

「内務省は煙草専売局、印紙御貼用済。味は至極可えで、喫んで見た上で買いなさい。大阪は安井銀行、第三蔵庫の担保品。今度、同銀行蔵掃除について払下げに相成ったを、当商会において一手販売をする、抵当流れの安価な煙草じゃ、喫んで芳ゆう、香味、口中に遍うしてしかしてそのいささかも脂が無い。私は痰持じゃが、」

と空咳を三ツばかり、小さくして、竹の鞭を袖へ引込め、

「この煙草を用いてから、とんと悩みを忘れた。がじゃ、荒くとも脂がありとも、ただ強いのを望むという人には決してこの煙草

は向かぬぞ。香味あって脂が無い、抵当流れの刻はどうじゃ。」

と太い声して、ちと充血した大きな瞳をぎょろりと遣る。その風采、高利を借りた覚えがあると、天窓から水を浴びそうなが、思いの外、温厚な柔和な君子で。

店の透いた時は、そこらの小児をつかまえて、

「あ、然じゃでの、」などと役人口調で、眼鏡の下に、一杯の皺を寄せて、髯の上を撫で下げ撫で下げ、滑稽けた話をして喜ばせる。その小父さんが、

「いや、若いもの。」

という顔色で、竹の鞭を、卜笏に取って、尖を握って捻向きながら、帽子の下に暗い額で、髯の白いに、金が顕な北叟笑。

附穂なさに振返った技師は、これを知ってなお照れた。

「今に御覧じろ。」

と遠灯の目ばたきをしながら、揃えた膝をむくむくと揺って、

「何て、寒いでしょう。おお寒い。」

と金切声を出して、ぐたりと左の肩へ寄凭る、……体の重量が、他愛ない、暖簾の相撲で、ふわりと外れて、ぐたりと膝の崩れる時、ぶるぶると震えて、堅くなったも道理こそ、半纏の上から触っても知れた。

げっそり懐手をしてちょいとも出さない、すらりと下った左の、その袖は、何も支えぬ、婦は片手が無いのであった。

九

もうこの時分には、そちこちで、徐々店を片附けはじめる。まだ九時ちっと廻ったばかりだけれども、師走の宵は、夏の頃の十二時過ぎより帰途を急ぐ。

で、処々、張出しが除れる、傘が窄まる、その上に冷い星が光を放って、ふっふっと洋燈が消える。突張りの白木の柱が、すくすくと夜風に細って、積んだ棚が、がたがた崩れる。その中へ、炬燵が化けて歩行き出した体に、むっくりと、大きな風呂敷包を背負った形が糶上る。消え残った灯の前に、霜に焼けた脚が赤く見える。

中には荷車が迎(むかい)に来る、自転車を引出すのもある。年寄には孫、女房にはその亭主が、どの店にも一人二人、人数が殖(ふ)えるのは、よりよりに家から片附けに来る手伝、……とそればかりでは無い。思い思いに気の合ったのが、帰際(かえりぎわ)の世間話、景気の沙汰(さた)が主なるもので、

「相変らず不可(いけ)ますまい、そう云っちゃ失礼ですが。」

「いえ、思ったより、昨夜(ゆうべ)よりはちっと増(まし)ですよ。」

「また私(わたくし)どもと来た日にゃ、お話になりません。」

「御多分には漏れませんな。」

「もう休もうかと思いますがね、それでも出つけますとね、一晩でも何だか皆さんの顔を見ないじゃ気寂(きさみ)しくって寝られません。

……無駄と知りながら出て来ます、へい、油費えでさ。」

と一処に団まるから、どの店も敷物の色ばかりで、枯野に乾した襁褓の光景、七星の天暗くして、幹枝盤上に霜深し。

まだ突立ったままで、誰も人の立たぬ店の寂しい灯先に、長煙草を、と横に取って細いぼろ切れを引掛けて、のろのろと取ったり引いたり、脂通しの針線に黒く畝って搦むのが、かかる折から、歯磨屋の木蛇の運動より凄いのであった。

時に、手遊屋の冷かに艶なのは、

「寒い。」と技師が寄凭って、片手の無いのに慄然としたらしいその途端に、吹矢筒を密と置いて、ただそれだけ使う、右の手を、すっと内懐へ入れると、繻子の帯がきりりと動いた。そ

のまま、茄子の挫げたような、褪せたが、紫色の小さな懐炉を取って、黙って衝と技師の胸に差出したのである。

寒くば貸そう、というのであろう。……

挙動の唐突なその上に、またちらりと見た、緋鹿子の筒袖の細いへりが、無い方の腕の切口に、べとりと血が染んだ時の状を目前に浮べて、ぎょっとした。

どうやら、片手無い、その切口が、茶袋の口を糸でしめたように想われるのである。

「それには及ばんですよ、ええ、何の、御新姐。」と面啖って我知らず口走って、ニコチンの毒を説く時のような真面目な態度になって、衣兜に手を突込んで、肩をもそもそと揺って、筒服の

膝を不状に膨らましたなりで、のそりと立上ったが、忽ちキリキリとした声を出した。

「嫁娶々々！」

長提灯の新しい影で、すっすと、真新しい足袋を照らして、紺地へ朱で、日の出を染めた、印半纏の揃衣を着たのが二十四五人、前途に松原があるように、背のその日の出を揃えて、線路際を静に練る……

結構そうなお爺さんの黒紋着、意地の悪そうな婆さんの黄色い襟も交ったが、男女合わせて十四五人、いずれも俥で、星も晴々と母衣を刎ねた、中に一台、母衣を懸けたのが当の夜の縁女であろう。

黒小袖の肩を円く、但し引緊めるばかり両袖で胸を抱いた、真白な襟を長く、のめるように俯向いて、今時は珍らしい、朱鷺色の角隠に花笄、櫛ばかりでも頭は重そう。ちらりと紅の透る、白襟を襲ねた端に、一筋キラキラと時計の黄金鎖が輝いた。

上が身を堅く花嫁の重いほど、乗せた車夫は始末のならぬ容体なり。妙な処へ楫を極めて、曳据えるのが、がくりとなって、ぐるぐると磨骨の波を打つ。

十

露店の目は、言合わせたように、きょときょとと夢に辿る、この桃の下路を行くような行列に集まった。

婦もちょいと振向いて、（大道商人は、いずれも、電車を背後にしている）蓬莱を額に飾った、その石のような姿を見たが、衝と向をかえて、そこへ出した懐炉に手を触って、上手に、片手でカチンと開けて、熟と俯向いて、灰を吹きつつ、

「無駄だねえ。」

と清い声、冷かなものであった。

「弘法大師御夢想のお灸であすソ、利きますソ。」

と寝惚けたように云うと斉しく、これも嫁入を恍惚視めて、あたかもその前に立合わせた、つい居廻りで湯帰りらしい、島田

の乱れた、濡手拭を下げた娘の裾へ、やにわに一束の線香を押着けたのは、あるが中にも、幻のような坊様で。

つくねんとして、一人、影法師のように、びょろりとした黒紬の間伸びた被布を着て、白髪の毛入道に、ぐたりとした真綿の帽子。扁平く、薄く、しかも大ぶりな耳へ垂らして、環珠数を掛けた、鼻の長い、頤のこけた、小鼻と目が窪んで、飛出した形の八の字眉。大きな口の下唇を反らして、かッくりと抜衣紋。長々と力なげに手を伸ばして、かじかんだ膝を抱えていたのが、フト思出した途端に、居合わせた娘の姿を、男とも女とも弁別える隙なく、馴れてぐんなりと手の伸びるままに、細々と煙の立つ、その線香を押着けたものであろう。

この坊様は、人さえ見ると、向脛なり踵なり、肩なり背なり、燻ぼった鼻紙を当てて、その上から線香を押当てながら、「おだだ、おだだ、だだだぶだぶ、」と、歯の無い口でむぐむぐと唱えて、

「それ、利くであしょ、ここで点えるは施行じゃいの。艾入らずであす。熱うもあすまいがの。それ利くであしょ。利いたりゃ、利いたら、しょなしょなと消しておいて、また使うであすソ。それ利くであしょ。」と嘗め廻す体に、足許なんぞじろじろと見て商う。高野山秘法の名灸。

やにわに長い手を伸ばされて、はっと後しざりをする、娘の駒下駄、靴やら冷飯やら、つい目が疎いかして見分けも無い、退

く端の褄を、ぐいと引いて、

「御夢想のお灸であすソ、施行じゃいの。」

と鯰が這うように黒被布の背を乗出して、じりじりと灸を押着けたもの、堪ろうか。

「あれえ、」

と叫んで、ついと退く、ト脛が白く、横町の暗に消えた。

坊様、眉も綿頭巾も、一緒くたに天を仰いで、長い顔で、きょとんとした。

「や、いささかお灸でしたね、きゃッ、きゃッ、」

と笑うて、技師はこれを機会に、殷鑑遠からず、と少しく窘んで、浮足の靴ポカポカ、ばらばらと乱れた露店の暗い方を。

……

さてここに、膃肭臍を鬻ぐ一漢子！

板のごとくに硬い、黒の筒袖の長外套を、痩せた身体に、爪尖まで引掛けて、耳のあたりに襟を立てた。帽子は被らず、頭髪を蓬々と抓み棄てたが、目鼻立の凜々しい、頬は窶れたが、屈強な壮佼。

渋色の逞しき手に、赤錆ついた大出刃を不器用に引握って、裸体の婦の胴中を切放して燻したような、赤肉と黒の皮と、ずたずたに、血筋を縢った中に、骨の薄く見える、やがて一抱もあろう……頭と尾ごと、丸漬にした膃肭臍を三頭。縦に、横に、仰向けに、胴油紙の上に乗せた。

正面(まむき)の肋(あばら)のあたりを、庖丁(ほうちょう)の背でびたびたと叩いて、
「世間ではですわ、めっとせいはあるが、膃肭臍は無い、と云うたりするものがあるですが、めっとせいにも膃肭臍にも、ほんとのもんは少いですが。」
無骨な口で、
「船に乗っとるもんでもが……現在、膃肭臍を漁(と)った処で、それが膃肭臍、めっとせいという区別は着かんもんで。
世間で云うめっとせいというから雌でしょう、勿論、雌もあれば、雄もあるですが。
どれが雌だか、雄だか、黒人(くろうと)にも分らんで、ただこの前歯を、」

と云って推重なった中から、ぐいと、犬の顔のような真黒なのを擡げると、陰干の臭が芬として、内へ反った、しゃくんだような、霜柱のごとき長い歯を、あぐりと剥く。

「この前歯の処ウを、上下噛合わせて、一寸の隙も無いのウを、雄や、（と云うのが北国辺のものらしい）と云うですが、一分一寸ですから、開いていても、塞いでいても分らんのうです。

私は弁舌は拙いですけれども、膃肭臍は確です。膃肭臍というものは、やたらむたらにあるものではない。東京府下にも何十人売るものがあるかは知らんですがね、やたらむたらあるもんか。」

と、何かさも不平に堪えず、向腹を立てたように言いながら、大出刃の尖で、繊維を掬って、一角のごとく、薄くねっ

とりと肉を剥(は)がすのが、――遠洋漁業会社と記した、まだ油の新しい、黄色い長提灯(ながぢょうちん)の影にひくひくと動く。

その紫がかった黒いのを、若々しい口を尖(とが)らし、むしゃむしゃと噛んで、

「二頭がのは売ってしもうたですが、まだ一頭、脳味噌もあるですが。脳味噌は脳病に利くンのですが、膃肭臍の効能は、誰でも知っている事で言うがものはない。

疑わずにお買い下さい、まだ確(たしか)な証拠というたら、後脚の爪ですが、」

ト大様に視(なが)めて、出刃を逆手(さかて)に、面倒臭い、一度に間に合わしよう、と狙って、ずるりと後脚を擡(もた)げる、藻掻(もが)いた形の、水掻(みずかき)

の中に、空を掴んだ爪がある。

霜風は蝋燭をはたはたと揺る、遠洋と書いたその目標から、濛々と洋の気が虚空に被さる。

里心が着くかして、寂しく二人ばかり立った客が、あとしざりになって……やがて、はらはらと急いで散った。

出刃を落した時、赫と顔の色に赤味を帯びて、真鍮の鉈豆煙草の、真中をむずと握って、糸切歯で噛むがごとく、引啣えて、

「うむ、」

と、なぜか呻る。

処へ、ふわふわと橙色が露われた。脂留の例の技師で。

「どうですか、腦脉臍屋さん。」
「いや、」
とただ言ったばかり、不愛想。
技師は親しげに擦寄(よ)って、
「昨夜は、飛んだ事でしたな……」
「お話になりません。」
「一体何の事ですか、」
「何(なに)やいうて、彼(か)やいうて、まるでお話しにならんのですが、誰が何を見違えたやら、突然(いきなり)しらべに来て、腦脉臍の中を捜すんですぞ、真白(まっしろ)な女の片腕があると言うて。」……

明治四十四（一九一一）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成4」ちくま文庫、筑摩書房
　　1995（平成7）年10月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十三巻」岩波書店
　　1941（昭和16）年6月30日発行
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2006年1月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

露肆

泉鏡花

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/